

Title	ベネデット・クロッチェの文芸批評と同時代のイタリアの詩人たち(Abstract_要旨)
Author(s)	國司, 航佑
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k18706
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	國司 航佑
論文題目	ベネDETト・クローチェの文芸批評と同時代のイタリアの詩人たち		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、20世紀のイタリアを代表する哲学者ベネDETト・クローチェの美学思想を、彼の文芸批評家としての活動に注目しながら読み解こうとするものである。以下のような3部構成で議論を進めつつ、彼の思想体系の中で、美学理論と文芸批評とが互いにどのような影響を与えつつ発展していったのか、という点を明らかにしていく。</p> <p>第1部（第1章～第3章） クローチェの美学思想の概要を紹介し、第2部以降における個別研究の前提となるべき情報を提供する。</p> <p>第1章ではクローチェの美学思想の受容史・研究史を紹介する。第2章においては、クローチェの主要な美学書と見なされる7作品の内容について、それぞれの梗概を紹介する。第3章では、クローチェの文芸批評家としての活動を、時系列に沿って紹介する。</p> <p>第2部（第1章～第3章） 同時代文学に対するクローチェの態度の変遷について、彼の美学理論の発展との関係を視野に収めつつ、考察を加える。</p> <p>第1章 クローチェは、1903年から1914年にかけて、評論誌「La Critica」の誌上で同時代文学に関する連載を行っている。この連載内で、詩人カルドゥッチが2度（1903年および1910年に）批評の対象となっているのだが、実のところ、同一の連載内で一人の作家を2度以上取り上げるということは、彼の文芸批評の一般的傾向から逸脱する行為である。論者は、こうした逸脱行為の理由を明らかにすべく、1903年から1910年までのクローチェ作品に検討を加え、次の3点を明らかにした。①クローチェは、1903年、カルドゥッチに始まるイタリア文学の歴史的図式を描くことを目的として連載を開始したものの、1909年そのプランを変更して再びこの詩人について論じるにいたった。②そのような経緯で1910年に発表された第2のカルドゥッチ考は、その直前に生じたクローチェの美学の理論的発展を反映した作品でもあった。③新理論が形成されていく過程でクローチェの念頭にあり続けたのはほかならぬ詩人カルドゥッチだった。</p> <p>第2章 クローチェは、作家ダンヌンツィオに関して2本の評論を著している（1904、1935）。クローチェ美学の主要作品『美学』および『詩について』の発表年（それぞれ、1902年、1936年）を考慮に入れると、クローチェの美学理論の変遷とダンヌンツィオに関する2本の評論との間になんらかの相関関係が想定される。論者はまず、先行研究における様々な見解を整理しつつ、<1904年のダンヌンツィオ考においては手放しの賞賛といくつかの留保とが入り混じったダンヌンツィオ評価が表されており、また1935年のダンヌンツィオ論においては全面否定に近い評価が下されているとする説が有力であることを論じた。だが実は、その「手放しの称賛」の理由については、いずれの研究者によっても説得的な説明がなされていない。論者は、これまで問題とされてこなかった様々なテキストを検証することにより、<1904年の直前にダンヌンツィオが多くの優れた作品を発表しており、ある種の復活を遂げたようにクローチェの目に映っていたことを明らかにし、以って「手放しの賞賛」の理由を提示することに成功した。</p>			

第3章 第1章、第2章の結果を踏まえつつ、同時代文学全般に対するクローチェの評価の変遷を分析した。クローチェは、1903年のカルドゥッチ考では《カルドゥッチを先頭に置くイタリア文学の新時代》を高く評価していたのだが、1907年に発表された論文においてはダンヌンツィオ、パスコリ、フォガツァーロの3者に代表される《最近のイタリア文学》の病的な傾向に対して苛烈な批判を加えるようになっていく。たった4年の間に生じたこの劇的な変化の原因を特定すべく、論者は、1903年から1907年にかけて執筆されたクローチェの文芸批評を、それらが再録された評論集『新生イタリアの文学』（1914・1915）との相違に注目しながら分析した。その結果、以下の4点が明らかになった。①当初、後期ロマン主義という頹廢の時代が過ぎ去り、カルドゥッチに始まるイタリア文学の「新時代」が到来しているとクローチェは感じていた。②その後、ダンヌンツィオに代表される次世代の文学者たちは、クローチェが期待していたものとは違う方向に進むことになる。③1906年末、クローチェはパスコリ文学について本格的な研究に取り組み、その不可解な性質「断片性」を発見した。④「断片性」が同時代文学全体の傾向であること、また「第3の世代」にいたってその傾向がより甚だしくなっていることが明らかになり、クローチェにはイタリア文学の復活が失敗に終わったと感じられるようになる。

第3部 第2部の結果を踏まえつつ、クローチェの美学思想における「倫理」の位置づけについて検討した。20世紀初頭に一世を風靡したクローチェの美学は、もともと、《芸術の自律》という原則に則り「芸術」と「倫理」の明白な区別を強調する理論として知られていたのだが、晩年のクローチェの著作の中には「芸術」を「倫理」と接近させているかのように見える言説がしばしば現れる。先行研究においては、こうした事実を重視しつつ、クローチェの美学理論がある時点を境に「倫理」を排除するものから包摂するものに変化してしまっただと考える傾向が主流である。論者はそれに対し、個々のテキストを丹念に読み込むことにより、クローチェが「倫理」に関して単純な意味での意見変更をしたわけではなかったことを明らかにした。クローチェは、一方では当初から芸術家は芸術家として誠実であるべきだと考えており、他方では、終生一貫してモラリズム（＜作家が実人生においても倫理的に優れているべき＞、＜モラルに反する題材を選んではいけない＞等の主張）を批判し続けている。また、「頹廢主義」と呼ばれる文学潮流に対して徐々に批判を強めていく際も、クローチェが問題としたのは、単なる官能的な描写や、非道徳的な題材選びなどでは決してなく、感情と表現（もしくは内容と形式）の不一致、もしくはその表れとしての「断片性」であった。晩年のクローチェが芸術家に求めた「倫理性」とは、表現の段階においては、「断片性」に反する力、作品のイメージを統合する力だったと言える。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀前半のイタリアを代表する二人の思想家のうち、ジョヴァンニ・ジェンティーレが主として歴史および政治思想を追求してファシスト体制の理論的支柱となり、政府の要職を歴任したのに対し、美学および文芸批評を得意としたベネデット・クロッチェは大学で教鞭をとることすらなく、常に在野の思想家として《La Critica》誌を中心にその活動を展開した。

本論文は、クロッチェの美学理論の発展の軌跡を、実際の文学作品に対する彼の批評活動との関係において捉え直すことによって正確に解釈することを目指したものである。従って研究内容が文学と哲学の両分野にまたがることから、審査もまたイタリア文学専修の教授陣と西洋近世哲学を専門とする審査委員とが緊密な協力のもとにこれを執り行なった。

クロッチェ哲学の最も重要な部分を占める美学思想が、文学、とりわけ同時代のイタリア文学に関する批評活動を通じて形成されたものであることは周知の事実であり、この点に鑑みるならば、國司論文の採ったアプローチはクロッチェ哲学の正確な理解を目指す上での正攻法と言えるものである。それにもかかわらずこれまで類似の研究が盛んに行なわれて来たとは到底言えない。クロッチェの存在そのものがさほど注目されて来なかったわが国においては、これを奇異とするべきではないとも言えようが、実際には諸外国においてもこうしたアプローチは必ずしも一般的ではない。この原因の一端は、まさにクロッチェ思想とイタリア文学との密接な関わり方そのものにある。すなわち、クロッチェの美学思想を考察の対象とするためには、まずもって彼が強い関心を寄せたイタリア文学の諸作品そのものに対する深い理解が要求されるのであるが、クロッチェのようなイタリアの知識人が自明と考えるレベルと外国人のそれとの間にはかなりのギャップが存在しているために、これが障害となってクロッチェ作品の十分な理解を阻んでいた可能性が高い。

一般にイタリアの文学は、テーマに内在する思想や作品内容と並んで、あるいはそれら以上に、表現のあり方やその技術的側面を重視する傾向が強く、クロッチェが批評の対象とし、従って本論文においても重要視されているカルドゥッチやパスコリ、ダンヌンツィオ等は、まさしくこうした傾向の強い詩人である。さらに、こうした傾向はクロッチェその人の文体にも欠けてはおらず、哲学的に正確な論述を追求する一方で、多分にレトリカルな表現が重要な役割を果たしているケースが少なくない。すなわち、クロッチェ思想の研究に当たっては、これらの表現が有する微妙な陰影を切り捨てることなく掬いあげ、適切な解釈を施すことが欠かせないことから、國司論文のようなアプローチを成功に導くためにはイタリア文学の専門知識と哲学の素養の両方が要求されるのである。未だ若い研究者である國司氏がこうした困難な試みに果敢に挑戦し、一定の成功を収めた点は高く評価することができる。

本論文は三部からなり、第1部においてまずクロッチェの美学思想の要点と彼の文芸批評家としての活動が時間的推移に沿って眺められ、第2部ではカルドゥッチとダンヌンツィオに関する《La Critica》誌他の批評を中心に、その評価の変化を綿密に追うことにより、時間的な推移に伴う変遷がミクロ・レベルで検証されている。そして、こうした分析に基づいて、初期のクロッチェ思想を特徴づけていた、倫理からの芸

術の独立という美学理念が大きく後退し、同時代の主要な文学潮流を退廃主義の名のもとに厳しく批判するに至ったかのように見える現象が決して本質的なものではないことを論証したのが第3部である。

これらのうち、本論文の価値を決定づける白眉とも言えるのが第2部における分析であり、とりわけその第2章で論じられたダンヌンツィオに対するクローチェの評価の劇的な変化、すなわち世紀初頭における手放しとも言える賛美と、1935年に発表された『詩について』に見られる辛辣な批判との間に横たわる無視し難い変化に関して、コンティニーをはじめとするこれまでの研究者たちの議論を批判的に総括しながら、一見したところ矛盾とも見えるダンヌンツィオ評価の変遷の真の原因を解くことに成功したのは大きな成果と言える。

クローチェの活動は20世紀の初頭から半ばの約半世紀にわたる長いものであり、イタリアにおけるその影響はまさに巨大であった。それだけにその反動もまた大きく、芸術と倫理の関係についての上記の「変化」を指摘する戦後の研究者たちの声もそうした一般的な趨勢と関連がある。しかし、そうした時代も今や終わりを告げ、今後はより客観的・歴史的なクローチェ像の探求が進められるであろうことは容易に推測できる。そうした流れを考慮する時、本論文に収められた、クローチェの諸著作の微妙な叙述の違いを時間的な推移に沿って記述したミクロ的なデータは、将来のクローチェ研究にとっても大きな意義を持つと同時に、研究モデルとしても評価されるに値するものである。

ただし、試みが大胆であっただけに、第3部において最終的な目標とされた論証そのものについては未だ完全と言えない点もある。それはクローチェの批評の対象となった文学作品に関して、彼がそれらのどのような点を捉えて評価、あるいは批判しているのか、といった具体的な追及が不足していることと、世紀の初頭から20年代に至る当時のイタリアの政治・社会情勢との関連についての考察に未だ不十分な点があることである。クローチェの「変節」とも見られてきた倫理・芸術間の関係を総合的に考察するためには、こうした彼を取り巻いていた文化的・社会的条件を考慮することにより、クローチェの活動をその中に位置づけることが必要になる。この面での調査は國司氏の今後の研究に待つことになろう。また、哲学者としてのクローチェを西洋近代哲学史の脈絡の中に位置づけるためには、ヘーゲル哲学等、彼にとって出発点となったはずの諸思想との関連についての記述が現段階において若干不足しているという指摘があったことを付け加えたい。しかしながら、これらの問題点は本論文の持つ意義を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。

なお、2015年1月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。